



Contents

❖ 大学祭は時代を映す鏡

— 半世紀前の大東祭にみる熱狂と無関心 —

❖ 百年史編纂事業の進捗状況について

❖ 清水正行遺稿集など

❖ 百年史編纂の現場から

❖ 大東アーカイブス活動記録

大東文化大学「池袋校舎 図書館」(昭和24年10月)

本学は1941(昭和16)年2月から1961(昭和36)年8月まで、池袋に校舎を構えていました。(1945年4月の空襲により校舎を焼失し、一時的に青砥仮校舎に移転していた時期を除く)。この間、本学は旧制専門学校から新制大学へと昇格を果たしました。大学昇格において何より不可欠とされたのが「図書館」再建でした。敗戦後の物資不足のなか、大東の人びとは必死で関係図書を集め、建築資材をそろえて図書館を建設したのでした。

Daito Archives Newsletter

大東文化歴史資料館
ニュースレター
エクス・オリエンテ

Vol.

34

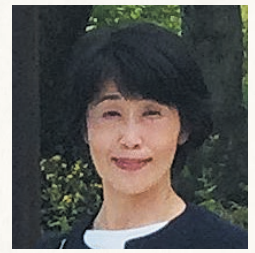
Ex Oriente

大学祭は時代を映す鏡

— 半世紀前の大東祭にみる熱狂と無関心 —

大東文化大学副学長

中野紀和（社会学部社会学科教授）



2023年6月3日に大東文化大学創立100周年記念事業の一環として、東松山キャンパスでホームカミングデーが開催された。前日まで開催が危ぶまれた天候も当日は持ち直し、多くの卒業生をはじめ大学関係者で賑わった。さながらマツリであった。私は文化人類学・民俗学の視点から祭りのフィールドワークを行ってきた。神社の祭りも新たに創造されたイベント、すなわちマツリも現代社会のなかで多様な意味が付与され機能している。祭りもマツリも社会を映す鏡である。そこで、大学における学生のマツリ、大学祭に注目してみたい。

大東文化歴史資料館が保有する史資料のなかに「大東祭」のパンフレットは4年分しか残っていない。1966（昭和41）年の第44回から1969（昭和44）年の第47回までである。この4冊を丹念に見ていくと、当時の世界情勢や大学をめぐる社会状況、そして本学にとっての大きな転換期が浮かび上がってくる。当時の大東祭のテーマは刺激的、かつ不穏な空気をはらんでいた。テーマ設定は第41回からとされる。第44回「ブームと学生と現代の疎外」、第45回「破」、第46回「連帯と前進」、第47回「大学の把握から未来への進展」が掲げられた。学生と大学との緊張関係が見てとれる。アメリカによるベトナム戦争に対する反戦運動が世界各地で起き、国内では大人数の学生を詰め込んだマスプロ教育や、大学の運営を非民主的な管理運営体制として糾弾する学園闘争の時代であった。そのような時期に、これだけ大掛かりな大学祭が開催できたことに、まず驚く。

開催期間は前夜祭から後夜祭までを含めて5日間。第44回は西台校舎（表記はすべてパンフレット通り）で開催され、前夜祭は仮装行列と大東おどり、11月3日から6日まではクラスやクラブ、諸団体による多彩な行事が催された。全大東音楽祭、ダンスパーティ、のど自慢大会、落語、映画、中国語劇に英語劇、複数の講演会、空手や剣道、バレーボール、卓球といったスポーツもあった。6日は閉会式と後夜祭が行われ、ファイアーストームとフォークダンスで終了となる。日頃の活動の成果発表の場でありつつ娯楽色も色濃い。

パンフレットの冒頭は学長や理事長、大東祭実行委員長（学生）、文学部、経済学部の学部長の挨拶文で始まっているのだが、予定調和とはいかない。1966年には東松山校舎の建設工事が既に着工しており、大東祭実行委員長は「クラブ活動、クラス活動に大きな支障をきたし、自治活動に大きな波紋をなげかける」と訴える。東松山校舎の開設については、大東祭実行委員会主催でビジョン討論会を開催する等、激しい反発をみせている。この討論会は、参加者として学長や理事長をはじめとする学園側と実行委員会やサークル代表の学生が列記されている。趣旨説明では、1961年の西台移転によるマスプロ化の進行、授業料や納付金の高さに言及しており、学園紛争のスローガンと共鳴している。一方で、パンフレット冒頭の学生部長の挨拶

文は、大東祭期間中の帰省学生の多さを残念がる。冷めた学生と熱い学生の二分化は今も昔も変わらないようだ。

1967年は現在の2キャンパス制が始まった年である。大東祭のテーマは「破」、掲げられたスローガンには「自主的民主的」「連帯」といった言葉が多用される。当時の大東文化大学は学内での騒乱は起きていないようだが、学園紛争の影響がなかったわけではない。

この年、大東祭の開会式と新たに発足した体育連合会による「第1回体育祭」が、11月1日に東松山教養部野球場で開催された。体育祭の内容は、障害物競走や演舞、リレー等、現在の運動会と変わらない。10月31日の前夜祭、11月2日から4日にかけての文化行事と後夜祭は本校（西台）開催となり、新たな形で大東祭が模索されたようだ。最終日は國學院大學、駒澤大学、早稲田大学、中央大学が出演する音楽祭も開かれている。曲目はカントリー・ウェスタンやハワイアン等、穏やかな印象を受けるが、これらの大学が学園紛争のただなかにあったこともあり、どのような学生が集まったのか、当時の学生のネットワークが気になる場所である。

第46回から体育祭が数日早くなり、10月28日に東松山教養部ラグビー場で開催され、大東祭開催宣言もそこに組み込まれた。西台校舎での31日の前夜祭以降の流れは前年とほぼ同じであった。

この年のパンフレットは、学長と学生代表の挨拶文の内容が見事に対立している。学長は「騒乱事件は一つも起こらない」ことを強調するのに対し、体育行事責任者は、1966年からのカリキュラム制導入でクラス意識の希薄化を指摘する。文化行事責任者は、無料スクールバス問題、図書館、寮、食堂問題、学内民主主義を訴える。クラス行事責任者も、キャンパス二分化によるクラブ活動弱体化、理事・教授・学生の三位一体の学園建設無視を批判する。キャンパス二分化による学生活動の弱体化と、他大学で見られたような紛争が起きていないことは、あながち無縁ではないのかもしれない。だからこそ、大東祭のパンフレットは学生が意見を表明する絶好の機会であったと考えることもできる。

第47回は、10月26日に体育祭が東松山教養部陸上競技場で開催された。初めて体育祭にテーマが設定され、この年は「知」であった。前夜祭は板橋校舎で催され、西台ではなく板橋という表記がパンフレット上で使われる。この年もクラスへの無関心さを嘆く大東祭実行委員会クラス局長の声があった。

およそ半世紀前のわずか4冊のパンフレットであるが、日本を揺るがした出来事のさなかの大東生の様子が窺える貴重な史料であった。大東祭はやはり時代を映す鏡である。2023年、創立100年目のマツリは何を映すのだろうか。

百年史編纂事業の進捗状況について

百年史編纂委員会委員長

中村宗悦

本学100周年記念サイト (<https://www.daito.ac.jp/100/>) に掲示されているカウントダウンの日数もいよいよ50日を切ってきました。百年史編纂委員会でも9月17日に予定されている創立記念式典（オンライン開催）にあわせて『大東文化大学百年史』上巻を刊行できるように準備を進めています。先日、本文と資料の2回目の校正刷りの精査が完了し、いよいよ最終段階に入りつつあります。全体のページ数や装丁もほぼ確定しました。皆さまにご披露できる日を製作に携わった全員が楽しみにしているところですが、上巻の内容を少しだけご紹介しておきます。

まず扱われる時期ですが、1920年代の漢学振興運動期から日本の敗戦までとなります。教育史の観点からみた場合、1910～20年代はいわゆる大正自由教育運動が盛り上がりを見せた時期に当たり、文教政策的にも原内閣の高等教育拡張政策を受けて1919（大正8）年の大学令施行に伴って多くの専門学校が大学へと昇格しました。第一次世界大戦による日本経済の急速な成長がその背景にあり、多くの人びとが中等以上の学校教育を受ける環境が整いつつあったからです。本学もそうした時代背景のなかで新たな理念を掲げた専門学校としてスタートします。上巻では、漢学振興運動の具体的内容や建学当初のカリキュラムの変遷、入学定員の増加に関する申請、諸橋轍次による『大漢和辞典』の編纂とそれに協力した学院の学生たち、経済学部の前身となる東亜政経科設置の経緯など、当時の資料をふんだんに掲載しています（字体は原則新字体にして読者の便宜を図っています）。本文には資料編のどこに根拠資料が掲載されているかも示していますので、是非とも資料と対照しながらお読み下されば幸いです。上巻は本文が約200ページで、後半の300ページ分は本文の叙述の根拠資料となります。使用された資料は、『大東文化大学五十年史』『大東文化大学七十年史』にも収録されている資料を若干含みますが、ほぼ新たな資料だと言って良いでしょう。大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）にしか所蔵されていない貴重なものも多いので、ご期待ください。

なお来年度公刊予定の中巻、そして再来年度に完結する下巻の準備作業も始まっています。中巻は敗戦後の大制度改革に対応しつつ新制大学として再出発を図るところから始まり、

1991（平成3）年の大学設置基準等の改正前後までが扱われる予定であり、最終巻の下巻は、1991年以降、2023年までの約30年を対象となります。こちらも本学所蔵の理事会資料や合同教授会資料などの一次資料を用いながら、本学の歴史に新たな光を当てていきたいと考えています。

さて、前号でお知らせした『大東文化学院の人びと』（学文社）も3月末に無事刊行されました。すでに全国の図書館等や関係各位にはお配りし、希望をくださった皆さまのお手元にも届いていることかと存じます。すでに多くの方々から読後の感想や励ましのお言葉などを頂戴しております。この場を借りて御礼申し上げる次第です。電子版もすでに「継往開来」ページ (<https://www.daito.ac.jp/100th/publications/06.html>) にアップロードされ、PDF形式、EPUB形式ともに無料でお読みいただけますのでこの機会に是非お目通しをいただければ幸いです。なお本書は全学共通科目の『自己・人間をみつめる 現代の大学』受講生約160名にも配布され、自校史教育にも役立てられています。また百年史編纂委員会では引き続き「継往開来」 (<http://www.daito.ac.jp/100th/>) の内容充実をはかり情報発信を進めて参ります。是非、ご覧いただき、ご感想などをお寄せいただければと思います。

最後に、大東文化大学史研究紀要編集委員会より2023年度末に刊行予定の『大東文化大学史研究紀要』第8号へのご投稿のお知らせです。現在、編集委員会では第8号掲載の論文等を募集しています。大学史に関するご研究の発表、資料のご紹介などございましたら是非奮ってご投稿をいただきますよう、お願い申し上げます。ご投稿に関するご質問や資料情報のご提供などに関しましては、下記の100周年記念事業推進室内大東文化歴史資料館事務担当までお知らせください。

大東文化歴史資料館事務室

(100周年記念事業推進室内)

電話 / 03-5399-7403 FAX / 03-5399-7391

archives@ic.daito.ac.jp

清水正行遺稿集など

大東文化学院19期生である清水正行氏の著書3点が、大東文化歴史資料館に所蔵されることとなった。歴史資料館運営委員をつとめる太田政男氏（大東文化大学名誉教授・同元学長）より清水氏の著書を紹介されたことをきっかけに、長野県高校教育会館の細尾氏から寄贈いただいた『是一心 清水正行遺稿集』（1986年、長野県高等学校教職員組合）を含む、『教師の見た中国—社会主義建設をめざす七億の躍動—』（1966年、長野県高等学校教職員組合）、『教育惑問』（1982年、同時代社）を入手した。（以下、敬称略）。

清水正行は“しみずまさゆき”が本名であるが、著書を刊行する場合などには“しみずまさつら”とも名乗った。1921（大正10）年に長野県東部町に生まれ、旧制中学卒業後に3年ほど代用教員をつとめた後、学問を志し大東文化学院への進学を決意した。1942（昭和17）年4月に大東文化学院本科第一部修身漢文科へ入学、戦時下であったため勉学の合間には学徒動員を経験しつつ、1944（昭和19）年9月に繰り上げ卒業した。もっとも戦禍が激しかった頃に在籍した大東生であった。卒業後はすぐに徴兵され、戦地へと赴いた。敗戦後の1945（昭和20）年10月に復員、1947（昭和22）年4月より長野県東部町で高校教員をつとめた傍ら、長野県高等学校教職員組合専従役員、同組合執行委員長を20年以上にわたって歴任した。なお、復員から教職に就くまでに1年余りの時があるが、この間、長野県上田市にある大輪寺に身を寄せ、仏典を読む生活を送りつつ人生の思索を深めると同時に、退職後に故郷松代に閑居していた大東文化時代の恩師・飯島忠夫をたびたび訪ねて旧交を温めた。

著書『教育不惑』には、大東文化学院時代の思い出や、飯島忠夫と長く続く師弟関係について比較的詳しく記している。戦禍が激しくなった時期に在籍したため漢学を学べたのは実際には1年余りであったこと、入学後すぐさま勤労働員として「戦力としての存在を強いられるようになった」が、学徒として動員された先では夜になれば「論孟を語り、朱晦庵を論じ、そして宋学を論じ」「李杜を語り、淵明や白居易を語った」日々であったこと、そうした日々は「道を求めてやまざるもの」たちが集ったがゆえの「学院生活における教えの然らしめるところであり、その延長であった」（『教育不惑』24ページ）などと、在学中の生活を表現している。また、清水自身は儒教のなかでも特に「孟子を好んだ」（同書33ページ）と述べているが、敗戦直後の寺での生活から仏教にも精通することとなり、後に宗教者としての道元や親鸞についての学者となっていくこととなった。

一方、『是一心 清水正行遺稿集』に付された年譜からは清水の生涯を知ることができる。それに加えて、同書は大東文化学院時代の同窓生二人へ宛てた書簡・ハガキ4点などを所収している。所収されているハガキは2葉あり、どちらも同窓生で

あった三沢三男宛で、1944（昭和19）年11月14日および同年同月21日に出されたものである。どちらも戦時下、動員によって離れ離れで迎える卒業を直前に控え、互いの近況を報告しあう内容である。母校の中学校（旧制）で教職に就くことが決まったという三沢に対し、「大東で得たものを思う存分に発揮して万丈の気を吐かれる様祈る」「矢張り三沢君は大東健児だった」「大東に於ける二年有半、又何時の日にか肩を叩いて当時が語れようか。本当に俺達は発展的解消であったと思ふ」と動員先からのハガキに激励の気持ちを含めて記している。また、敗戦後の1945（昭和20）年9月ごろと思われる時期、同じく同窓生の榊原茂夫宛に出した書簡には、「ツブシのきかない大東生たるや誰も彼も可なり苦しみを待っている」と、自身も含めて就職先の決まらない大東生たちの名前を挙げつつ、「どうせ閑でせうから出来たら東京で落会って大いに語ってみませんか」などと綴っている。「ツブシのきかない」というのは、特に清水らの在籍した第一部修身漢文科のことを指していると思われる。修身漢文科は大東文化学院創設時より続く正統派漢学専攻コースであったが、それゆえに資格として取得できるのは中等学校の漢文科教員免許のみであった。そのため、教職への就業も狭き門で厳しかったのである。

両書を通じ、恩師飯島忠夫の名前が多く確認される。飯島は前述したように長野県松代出身であり、東京帝国大学選科を修了した文学博士であった。東洋史学を専門とし、主著に『支那古代史論』がある。学習院中等科教授、東宮御学問所御用係をつとめる傍ら大東文化学院教授となった。退職後は松代へ戻り静かな生活を送っていたが、1954（昭和29）年9月に死去するまでの9年間を思いがけず教え子の清水と交流することとなった。清水は大東文化学院に在学中、滞納していた学費を飯島が何も言わずに密かに肩代わりしてくれていたという恩もあり、復員時には生家の両親へ会うより前に飯島のもとを訪ねたのである。飯島の苦しい生活を見た清水は、たびたび訪ねては食料を届けたことから交流が再開した。二人のやりとりから飯島晩年の学問的交流の様子を知ることできる。

最後に、『教師の見た中国—社会主義建設をめざす七億の躍動—』は、日本高等学校教職員組合が日中交流第一次代表団を派遣した際の記録である。日中国交正常化以前の1965（昭

和40)年7月から8月にかけて、およそ1ヶ月の旅程で行われた中国訪問は、中国の学校、文化施設、福祉施設などに加え、各種工場の様子や人民公社や農村を視察し、現地の人々との交流を深めることを目的に実施された。この代表団4人のメンバーのなかの1人となった清水は、もっとも積極的かつ精力的にこの視察旅行に参加し、旅の記録を一人でまとめあげ、その報告書を刊行したのである。同書は清水の中国文学への深い造

詣、日中関係への関心、真実を正確に伝えようとする努力、中国の人々の暮らしへの敬意などが随所に感じられる優れた著書である。言うまでもなく、清水の中国に関する造詣と知識の基礎は大東文化学院で出会った恩師たちから得たものであったと見てよいだろう。

(歴史資料館運営委員・専任研究員 浅沼薫奈)



終章	281	目次	
		穆堂飯島忠夫博士書	
		行平宮入堅一刀匠書	
		はしがき	1
		第一章	7
		第一節 大輪寺山坊福居	7
		第二節 私における儒学	8
		第三節 私における道元	21
		第四節 私における親鸞	42
		第二章	65
		第一節 恩師穆堂飯島忠夫先生	65
		第二節 先師刀匠宮入行平先生	94
		第三節 父と母として故旧と	93
		第三章	140
		第一節 東部町彌津中学校に在りて	140
		第二節 小県東部高校に在りて	159
		第四章	197
		第一節 教職員組合と私	197
		第二節 今日の教育における若干の問題	218
		1 政治権力による教育支配	217
		2 政治危機と教育	234
		3 教育荒廃の基本的根源	218
		4 教職員に問うもの問われるもの	217

資料寄贈ご協力をお願い

大東アーカイブスでは、引き続き本学関係資料のご寄贈をお願いしております。学園沿革史に関わる資料がございましたら大東文化歴史資料館事務室(100周年記念事業推進室内)までご連絡いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

News

百年史編纂の現場から

大東文化大学百年史編纂委員会副委員長 谷本 宗生

前回の『エクス・オリエンテ』第33号では、私の担当としてもっか検討を続けている、『大東文化大学百年史』の第6章である東松山校舎の開校と板橋校舎の整備、第1節にあたる東松山校舎の建設を取り上げて言及いたしました。続くこの第34号では、第6章の第2節にあたる学生定員の増加について、その要点をみなさんにご紹介したいと思います。

第2次世界大戦後、我が国では6-3-3制の民主的な単線型学校制度や男女共学をはじめとした教育の機会均等が実現されます。そして、義務教育以後の新制高等学校への進学率も1970年代には9割をこえ、高校進学は準義務化の様相をおびていきます。いっぽう、新制大学（短期大学を含む）への進学率も、高度経済成長の影響を受けて、60年に10.3%、70年に23.6%、80年には37.4%と上昇し、我が国の高等教育も欧米先進諸国と並び、大衆化時代を迎えていく過程でした。

1966（昭和41）年9月に、文部省に申し出た本学の学生定員の変更では、当時現有の本学入学定員は文学部80名（日本文学科40名・中国文学科40名）、経済学部200名（経済学科100名・経営学科100名）でしたが、実際に在学した第1年次生は文学部506名（日本文学科396名・中国文学科110名）、経済学部1248名（経済学科862名・経営学科386名）という状況で、「近來文学部・経済学部共に応募者が激増し、現在の定員をもってしては、到底社会の要望を満たすことは不可能であり、教育の機会均等を期することが出来ないで、必要な機械・器具・図書その他施設の拡充に遺憾なきを期し、前記の通り定員増を申請する次第である」（定員増員の事由）とし、本学への急激な入学者数に対応すべく、新設の文学部英米文学科50名、既設の文学部中国文学科40名に対し、文学部日本文学科40名⇒100名、経済学部経済学科100名⇒200名、経済学部経営学科100名⇒150名とされる、学生の入学定員の増員を試みとしたのでした。

さらに翌67（昭和42）年9月にも、文学部外国語学科の増設とともに文部省に届け出た学生定員の変更では、「近年我国において、大学進学希望者は、その教育の重要性から年々増加の一途をたどっている現状である。しかも目下学生急増期を迎え、本学においてもこの影響を受け昨今特に入学希望者が急増してきた為、今年

度施設設備の充実を計り教育の徹底につとめている。以上のことから、本学の学生現員数は入学定員数と比べる時、その基準より格差を生じている。従って、今回学生定員を変更（増員）し、この格差を幾分ちぢめることによって教育効果をより徹底し、社会の要請にこたえるべくここに学生定員の変更（増加）をする次第である」（定員増加の事由）とし、新設の文学部外国語学科80名、既設の文学部日本文学科100名、経済学部経済学科200名、経済学部経営学科150名に対し、文学部中国文学科40名⇒80名、文学部英米文学科50名⇒80名といった、新たな学生入学定員を行うとしたのでした。

さらに外国語学部（中国語学科・英語学科）と文学部教育学科の設置とともに、71（昭和46）年9月に文部省に届け出た学生定員の変更でも、先の届け出と同じく「本学の学生現員数は入学定員数と比べる時、その基準より格差を生じている。従って今回学生定員を変更（増加）し、この格差を幾分ちぢめることによって教育効果をより徹底し、社会の要請にこたえるべく、ここに学生定員を変更（増加）するものである」（定員増加の事由）とし、新設の外国語学部160名（中国語学科80名・英語学科80名）、文学部教育学科40名、既設の経済学部350名（経済学科200名・経営学科150名）に対し、文学部日本文学科100名⇒200名、文学部中国文学科80名⇒100名、文学部英米文学科80名⇒100名といった、学生入学定員を設けるとしたのでした。

そして法学部法律学科の設置とともに、翌72（昭和47）年9月に文部省に届け出た学生定員の変更では、新設の法学部法律学科200名、既設の文学部440名（日本文学科200名・中国文学科100名・英米文学科100名・教育学科40名）、経済学部経営学科150名、外国語学部160名（中国語学科80名・英語学科80名）に対し、経済学部経済学科200名⇒300名といった、学生入学定員に新たに変更（増加）すると定めたのでした。これに対して、(1) 採用予定の教員は、計画どおり確実に採用すること、(2) 建設予定の校舎は、計画どおり確実に建設すること、(3) 学生定員を厳守すること、といった改善または充実すべき留意事項が付されたうえで、届け出のとおり認可承認されたのでした。

正

このたび左記の通り文科増設並びに学生定員を変更したので、
添紙を添えてお届いたします。

大東文化大学 文学部外国語学科増設及び学生定員変更届出書

敬 啓 者
学校法人 大東文化学園
理事長 南 條 徳 男



大東文化経済事務第八九号
昭和四十二年九月三十日

(学生定員変更)

変更学科名	学生定員		総定員人
	旧	新	
文学部中国文学科	四〇	八〇	一二〇
文学部英文文学科	五〇	八〇	一三〇

(文科増設)

増設学科名	学生定員	総定員人
文学部外国語学科	八・八〇	三二〇

記

調 査 表

大学名	大東文化大学		位置	東京都板橋区大塚四丁目1102	
学部	既設	文学部 日本文学科 460-100 文学部 中国文学科 100-40 文学部 英文文学科 30	経済学部	経済学科 200 経営学科 150	開設時期 昭和39年 第1年度
学科	既設	文学部 中国文学科 40-80 文学部 英文文学科 30-80			
併設学校	専修 230、通信制経済学専攻(24) 110				
区分	費用	定員	定員	開設時期	1年度
① 総合	費用	63,025	150,844		昭和39年 昭和41年(増設)
	共用	120,400		同左	
② 総合	費用	12,065	16,466		昭和39年 昭和41年
	共用	4,079	52,671		
区分	定員	定員	開設時期	1年度	2年度
③ 学部	人文系	2	4	3	
	社会科学系	7	2	2	
	自然科学系	12	5	3	同左
	外国語系	5	5	9	
	経済学系	1	1	5	
④ 学科	経済学	27	16	17	22
	日本文学科	6	3	5	7
	中国文学科	6	3	5	1
	英文文学科	6	3	3	4
⑤ 学部	日本文学科	460	13,056		
	中国文学科	100	3,531		
	英文文学科	30	5,253		
	外国語学科	80	2,727		
⑥ 学部	経済学	200	1,306		
	経営学	150	1,127		
⑦ 学部	日本文学科	100	3,710	270	124
	中国文学科	50	100	70	20
	英文文学科	30	100	30	100
	外国語学科	80	5,138		
	経済学	200	710	815	437
	経営学	150	311	291	191
合計				2,681	2,227

大東アーカイブス活動記録

2022年10月～2023年3月

10.3	『大東文化大学百年史 上巻』掲載資料精査
10.5～7	全国大学史資料協議会全国総会・研究会・見学会（於：神奈川大学）
10.20	『大東文化大学百年史 上巻』掲載資料精査
10.27	『大東文化学院の人びと』出版打ち合わせ
11.10	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会（オンライン）
11.28	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会）
11.29	百周年記念式典打ち合わせ
12.15	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（於：杉村楚人館）
12.19	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会） 紀要編集委員会（第一回）
1.13	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会）
1.18	大東BBQ関係資料寄贈受領
1.23	ドイツより辜鴻銘（Gu Hongming）に関する問い合わせ対応
1.25	岡崎邦彦東洋研究所所長より資料受領
1.23	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（於：国士舘大学）
2.15	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会）
2.20	資料デジタル化（依頼）
2.22	羽山忠弘名誉教授関係資料受領
2.24	WG会議
2.28	ニューズレター「Ex Oriente」vol.33発行
3.3	WG会議
3.8	百年史編纂委員会（第二回） 歴史資料館運営委員会（第二回）
3.13	「憂国の士 三塩熊太」著作受領
3.16	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（於：法政大学）
3.20	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会）
3.24	「スポーツ大東」部室在庫資料の確認 地域連携センターより資料移管（写真） 大東文化大学第一高等学校より資料移管（写真パネル）
3.29	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会）
3.31	『大東文化学院の人びと』刊行 『大東文化大学史研究紀要』第7号発行

お知らせ

歴史資料館(大東アーカイブス)展示室において、
第27回企画展「大東の入試と学生募集の100年(仮)」公開を予定しています。

展示期間: 2023(令和5)年9月1日～(終了日未定)

開室時間: 毎週月～金曜日 9:00～17:00

展示場所: 大東文化歴史資料館 展示室(板橋校舎2号館1階)

大学の休校日や入試日などに準じて閉室することがあります。また、公開日を変更することがあります。
詳しくは大学HPなどをご確認ください。

Ex Oriente | Daito Archives Newsletter Vol.34

発行: 2023年7月31日

編集発行: 大東文化歴史資料館(大東アーカイブス)

〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10 大東文化大学徳丸研究棟3階

TEL 03(5399)7646 FAX 03(5399)7647

E-mail: archives@ic.daito.ac.jp

URL: https://www.daito.ac.jp/100th/archives/

『大東文化大学史研究紀要』 第8号 原稿募集

『大東文化大学史研究紀要』
第8号に掲載する原稿を募集
しています。投稿締切りは
2023年12月中旬を予定して
おります。投稿を希望される
方は、2023年10月末日まで
にこちらのメールアドレスへお
知らせください。ご質問等も
随時受け付けております。

エントリー（投稿）・そのほか
に関する問い合わせ先：

archives@ic.daito.ac.jp

「投稿規程」詳細について
は、百年史編纂サイト「継往
開来」(https://www.daito.
ac.jp/100th/bulletin/)

でも公開しておりますので、
必要に応じご確認くださいま
すようお願い申し上げます。
積極的なご投稿をお待ちして
おります。



Ex Oriente

『Ex Oriente』（エクス・オ
リエンテ）は、かつて大東文
化協会比較研究部が機関誌と
して1925（大正14）年4月に
創刊した雑誌名でした。英仏
独の3ヶ国語のうち、いずれか
で執筆された論文のみを掲載
し、欧米諸国へ向けて、東洋
文化に関する最先端の研究成
果を知らせたいとの目的で発行
された同誌は、当時わずか3号
のみの発刊（1988～93年に
東洋研究所が続号として4～6
号を発刊）となりました。以
降、幻となっていた雑誌名を大
東アーカイブスで受け継ぐこと
といたしました。